

ディベート入門

井上, 奈良彦
九州大学大学院言語文化研究院

<https://hdl.handle.net/2324/7172277>

出版情報 : pp. 1-11, 2011-09-09
バージョン :
権利関係 :



ディベート入門

井上奈良彦（2011年9月改定）

本稿では、最初に簡単にここで紹介する「ディベート」とは何かを規定し、以下、教育ディベートにおける論題の選定から実際の試合までの過程を順に紹介し、最後にディベートと倫理の問題について簡単に触れる。

目次

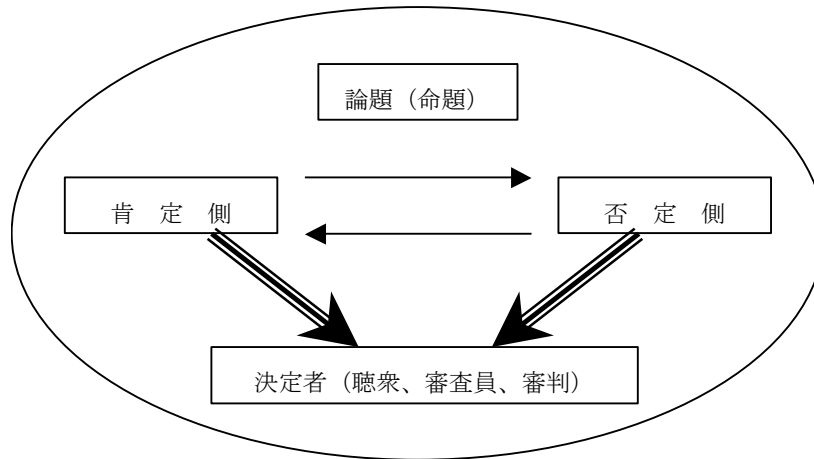
1. ディベートの基本
 - 1.1. ディベートとはなにか
 - 1.2. 教育ディベート
 - 1.3. ディベートと話し方教育
 2. 論題の選定
 3. ディベートの準備から試合まで
 - 3.1. 論題の分析
 - 3.1.1. 用語の定義
 - 3.1.2. 争点の発見
 - 3.2. 資料調査
 - 3.3. 肯定・否定論旨の構築
 - 3.4. 反論と反駁
 - 3.5. 口頭発表
 - 3.6. メモの取り方
 - 3.7. 反対尋問
 - 3.8. 伝達方法
 4. 議論のしくみ
 - 4.1. 議論の構造
 - 4.2. 根拠
 - 4.3. 論拠
 5. スピーチの構成
 - 5.1. 肯定側第1立論
 - 5.2. 反論単位
 6. ディベートの評価
 - 6.1. 勝敗
 - 6.2. 技能の評価
 7. ディベートと倫理
- 参考資料

1. ディベートの基本

1.1. ディベートとはなにか

ディベートという語は広義には、何かの問題について賛否両論を論じ合うことを意味する。車を買って替えるべきかどうかを検討したり、アイドル歌手の歌が上手かどうかを言い争うことも含まれる。スピーチ・コミュニケーション学の考え方では、（1）明確な論題について（2）肯定・否定の側に立つ参加者が（3）公正な規則の下で（4）合理的な議論によって（5）第三者を説得しようとする過程、と定義できる。ディベートはまた、問題の賛否両論を考慮することによって蓋然的真理（多分そうだろうという答え）を探求しそれを弁論によって伝達し擁護する過程と見られることもできる。実社会では、議会や法廷での論争が典型的なものである。ビジネスにおける意思決定なども、新たな商品企画などについて賛否両論を比較検討して企画の採否を決定するような過程はディベートの一種と考えられる。

図1. ディベートにおけるコミュニケーションの基本構造



1.2. アカデミック・ディベート

学校などで議論の訓練のために行うディベートを教育でディベート（アカデミック・ディベート）と呼び、教育効果を上げるために様々なルールや教育方法が論じられている。西洋では古代ギリシャ以来ディベート教育の長い伝統がある。英語圏ではオックスフォード・ユニオンなどの学生活動が19世紀以降発展した。アメリカでは20世紀に入ってスピーチ学が学問分野として確立するに伴い、教員が組織的に指導するようになり、イギリス系とは独自の発達を遂げた。このディベートは日本には福沢の三田演説会での「弁論会」の訓練、第二次大戦直後の討論大会、そして近年の新たなブーム、と様々な導入が試みられて来た。主として、アメリカで発達した論理的分析や資料を重視するスタイルがいわゆる「アカデミック・ディベート」として英語クラブを中心に導入され、日本語でのディベートもこのスタイルを継承している。ただし、1990年代以降、大学の英語クラブではイギリス系の即興型ディベート、いわゆる「パラメンタリー・ディベート」が台頭し人気を二分するようになった。

典型的な教育ディベートの試合のやり方は、例えば、「日本は裁判に陪審員制度を導入すべし」といった論題（命題）について肯定側チームと否定側チームがスピーチを交互に行う。まず、主要論点を提出する立論を肯定第1、否定第1、肯定第2、否定第2と行う（普通8分ずつ）。それぞれに3分間の反対尋問（質疑）が相手チームから行われる。次いで、反論・弁護を行う反駁を逆に否定側から初めて計4回行う（各4分）。最後に、審査員が講評と勝敗を口頭や審査用紙で伝える。日本の「ディベート甲子園」と呼ばれる中高生の大会や台湾の日本語ディベート大会で用いられている形式は、立論が肯定否定1回ずつで、スピーチの時間もやや短い。

議論の訓練のために行うのであるから、参加者は肯定・否定両側の議論を準備し、一つのディベートの中では自分の信念とは無関係に抽選などで決めた立場を最後まで守り通す。その立場になったつもりで最善を尽くすロール・プレーと考えればよい。

1.3. ディベートと話し方教育

ディベートは「音声言語活動」ではない、というのは極論であるが、音声言語は本質的な部分ではない、と筆者は考えている。確かに、ディベートは口頭で意見を戦わせる言語活動として、口頭コミュニケーションの一つとして存在する。しかし、口頭発表はディベート活動の一部にすぎない。ディベート教育の本質は論理的な議論の力を養うことにある。文章の論点を理解・分析・批評する力を養う。また、自分の主張を論理的に組み立て表現する訓練をする。口頭発表においても、原稿を用意したり、相手の発言やその反論をメモすることは不可欠である。ディベートは、現代の多くのコミュニケーション活動と同様、書き言葉の助けなしには成り立たない

2. 論題の選定

良いディベートのためには適切な論題を設定しなければならない。論題は明確な問題を一つだけ

含む肯定文で表す。内容は、事実・価値に関するものや行動や政策についてのものがある。例を挙げてみよう。

- 「地球以外に高等生命体は存在する」（事実）
- 「私立大学は国立大学より優れている」（価値）
- 「高等学校の制服は廃止すべきである」（政策）

論題の決定にはさらに次のような点に注意したい。

- (1) 肯定・否定それぞれの側に有利な論点があって双方の勝ち目が同じぐらいになるようにする。
- (2) 用語は中立なものにする。
- (3) 論題は現状の制度や一般の考え否定するような表現にする。これによって、肯定側は現状を変革し論題を証明する責任を負い、否定側がそれに反対する、という立場が明確になる。
- (4) 参加者の関心を引く問題で、資料調査を含めてあまり難しくないものを選びたい。

3. ディベートの準備から試合まで

この節では、ディベートをするための準備を論題が決まってから、実際にディベート（口頭発表）をするところまで追ってみる。各段階は必要に応じて何回も繰り返される。

3.1. 論題の分析

論題を参加者と一緒に選んだ場合は既に分析はかなり進んでいるだろう。そうでない場合、参加者は与えられた論題を解釈し分析することを一からはじめなければならない。

3.1.1. 用語の定義

分析の第一歩は、論題中の用語を定義し論題を解釈することである。これは単語の辞書的意味を調べるだけにとどまらない。「日本政府は公共の場所での喫煙を禁止すべきである」という論題では、具体的に何が「喫煙」に当たるのか、「公共の場所」とはどういう場所を含めてどういう場所は含めないのか、などを考える。

3.1.2. 争点の発見

肯定・否定の側にとどのような主要争点があるかを検討する。争点とは論題の肯定・否定に決定的に影響する大きな論点である。たとえば被告人が殺人罪かどうかを問う裁判（一種のディベート）では、動機の有無は争点であり、動機を立証するための個々の論点（被告人の金銭上の問題、被告と被害者の恋愛関係の問題など）と区別される。つまり、金銭問題の論点は否定されても恋愛関係の論点から動機という争点は立証される可能性がある。

政策論題については定常争点（stock issues）と呼ばれる着眼点が長年のディベート実践の中で整理されている。次の質問に肯定側は「はい」、否定側は「いいえ」と答えられるように論題を分析するとよい。この定常争点は分析のための道具であって、実際にディベートのスピーチを展開する場合には種々の立件方法（ケース戦略）というものが考えられる（後述）。

(1) **問題**。現状の政策を変えないといけないほど重大な問題があるか。問題の質的・量的深刻さを肯定側は論証する。論題を採択すれば得られる利益も争点に当たる。（害、重大性、必要性、harm, ill, significance, need などと呼ばれる。）

(2) **原因**。新しいやり方を採用しない限り解決できないほど問題が現状の制度と深く結び付いているか。（内因性（inherency）、blame とも呼ばれる。）

(3) **解決策**。問題を解決するための実行（実施）可能な政策案（プラン）はあるか。論題の規定する政策を具体化し、技術・人材・資源などの面で実行可能性を検討する。実質的な議論のために、肯定側の提案が国会を通るかどうかが憲法違反かどうかは問題にしない。（実行可能性は英語では practicality や feasibility、時に workability という用語が使われる。）

(4) **解決性**。肯定側政策案（プラン）は問題を解決するか。肯定側の計画が実行されたと仮定して、それが問題を解決する過程を検討する。（英語では *solvency* という用語が使われる。）

(5) **不利益（の不在）**。政策案の利益は不利益を上回るか。政策には副作用としての不利益が付きまとう。否定側から具体的な不利益を提出し利益を上回ることを論証する。肯定側は利益の方が大きいことを論証する。（英語では *disadvantage* という用語。デメリットやプランの弊害とも呼ばれる。）

3.2. 資料調査

ディベートでは客観資料に基づく議論を重視するので、資料調査が欠かせない。図書館等を使い、最近ではコンピューターネットワークの利用を含めて資料調査の方法を訓練する役割がある。（本稿では資料調査の詳細は省略）

3.3. 肯定・否定論旨の構築（立件方法）

論題の分析と資料調査で得られた肯定・否定の議論をどのように提示するか、全体的な戦略を考えなければならない。肯定側は事前に一貫した立件方法（戦略）を準備するが、否定側は予想される肯定側の立件方法に応じた準備が必要である。また、選択した立件方法に基づいて具体的にスピーチをまとめる必要がある。

一つのディベートで使う肯定（又は否定）側の立場をまとめたものをケース（立件案）と呼ぶ。一つの論題に複数のケースが考えられる。喫煙禁止の論題なら、肯定側は喫煙者自身の健康の害、間接喫煙による害、タバコの火による火災等を防ぐ、などのケースが考えられる。いくつかを組み合わせて使うこともできる。現状に堪え難い問題は無くとも、肯定側の政策は大きな利益を産むから、得られるべき利益を得ていないことが問題であると論ずる作戦もある。

否定側にもいくつかの立場（作戦）がある。肯定側の論点を順に否定していく「逐次反論（*straight refutation*）」や現状の制度の利点を積極的に示していく「現状擁護」作戦などがある。通常これと組み合わせられるのが、肯定側の提案する政策から新たに生じる不利益の論証である。さらに、問題は認めて論題が規定する以外の対抗案（*counterplan*）の方が肯定側の案よりすぐれた解決策であると論ずる作戦もある。

分析を進め、相手からの反論にどう応えるかやどのような資料が手元にあるかなども考慮し、立論のスピーチを作成する。（実際のスピーチの構成は第5節）双方とも立論（*constructive speech*）で自分達のケースの全体を示し、主要論点を論証できるようにする。ディベートの後半になって急に主要論点を加えたり変更してはいけない。

3.4. 反論と反駁

これがディベートの本領である。相手の議論を吟味し自分の議論を立て直すという過程を通じて、論理的思考を養い物事の真理に近づこうとするのである。

反論（*refutation*）は最初のスピーチ（肯定第1立論）以外のどのスピーチにも含まれる。原則として相手の主要論点に対する反論はそれが提出された直後の自分達のスピーチで行うべきである。沈黙は同意とみなされる。

反駁（*rebuttal*）という用語は二通りの意味で使われる。一つは、「再構築（立て直し）」の意味で、各チーム2回目以降のスピーチで相手の反論に再反論し自分達の主張を立て直すことである。もう一つは、ディベート後半のスピーチの名称で「否定側第2反駁」のように用いられる。反駁のスピーチでは、立論で提出された論点について議論を深めるために、反論と反駁を行う。相手の議論の不備を指摘したり、自分達の論点に新しい理由付けや資料を提出するが、新たな主要論点を出してはいけない。双方最後のスピーチでは全体のまとめも行う。

ディベートにおいて効果的な反論・反駁をするには、事前の準備が欠かせない。相手の議論を予測し、それに対する自分達の議論を用意する。実際のディベートでは相手の議論に合わせて、用意した議論を組み合わせたり修正したりして発表する。このようなあらかじめ準備した議論を書いた原稿を裁判の用語から準備書面（ブリーフ、*brief*）と呼んでいる。次に示すのは、「私立高校は公立高校よりすぐれている」という論題でディベートを想定して、例として筆者が作ったも

のである（証拠資料も実際のものではない）。否定側の、「公立高校の方が学費が安い」という論点に対する肯定側の反駁用である。

図 2. 準備書面の例

肯定（学費）
 （否定：公立高校の学費安い）

I. 学費の価値あり。たとえ私立のほうが学費が高くても、それだけの価値はある。教育は費用の問題ではなく質の問題である。

II. 大差なし。学費の問題は教育費全体の中で考えれば大した差ではない。

A. 3年間での差は100万円。XX省の統計によると2005年度の公立高校1年間の諸経費は約31万円に対し、私立高校では約64万円である。そうすると1年間での差額は33万円、3年間では約100万円になる。

B. 子供一人の教育費の総額は2400万円。『XX新聞』2006年4月1日によると、「ABC保険の調査では、子供一人に対して大学卒業までに保護者が支払う教育費の総額は... 私立大学医学部の場合、約2400万円、... 国立大学の文系の場合約600万円と推計されている。」このように2400万円にも達する。

C. 高校における私立と公立の差は数パーセント。教育費全体が2400万円の場合わずか4%にすぎない。

D. 私立の方が安いかもしれない。さらに、公立高校に行っても浪人して予備校に行ったり、国立医学部に入れず私立医学部に行けば、私立校から国立医学部に合格したほうが安くなる。

結局、私立の学費は必ずしも高いとは言えない。

3.5. 口頭発表

口頭発表の準備には、ディベートが始まる前にすることと、ディベートの中ですることがある。ディベートが始まる前には、肯定側第1立論の原稿の準備、前述の準備書面の用意、それらを読む練習などがある。ディベートが始まってからは、相手の議論を聞いてメモを取り、それに対する反論をメモしたり、用意してある準備書面を組み合わせたりして次のスピーチの準備をする。

肯定側第1立論はディベートの中で最初のスピーチなのでそのまま読めばいい原稿を用意する。肯定側第1立論以外のスピーチは、理想的には用意した準備書面を組み合わせたりしてその場で準備しなければならない。準備書面は予想される論点毎に自分達の反論・反駁のポイントを書き、その理由付けや証拠資料を添付する。

口頭発表をどの程度準備するか、どの程度即興で議論を行うかは、ディベートの訓練で何を重視するかによって違って来る。また、母語で行うのか外国語で行うのかにもよるだろう。分析、資料収集、論理的な議論の構成などの能力を養成することに重きを置くならば、事前に肯定側と否定側のチームがスピーチを交換して反論のスピーチを作り、さらにそれを交換するというようにして、ディベート全体のシナリオを作ってしまうのも手である。もし授業で一人の学生について、ディベートでスピーチを発表する機会が一、二回しかないならば、このシナリオ方式の方が、その場でスピーチをするよりも得るところが大きいだろう。その場で考えていいかげんなスピーチをするよりも、きちんとした議論を組み立てて用意したスピーチを発表するほうが望ましい。

逆に、口頭で即座の理由付けや反論の技能を訓練することに主眼があるならば、原稿を用意しないでしゃべることになる。最初の立論は準備するが、その後のスピーチは即席とすることもできる。

きる。完全に即興型（パラメンタリー・ディベートと呼ばれる）の場合、ディベートの始まる直前（たとえば20分前）に論題を発表して両チームが準備を始めるという方法となる。この場合、もちろん引用資料は用いない。

3.6. メモの取り方

反論・反駁を効果的かつ確実に行うために、ディベートではフロー・シートと呼ばれる特別なメモの取り方がある。横長の紙を用意して（ノートの見開きを使ってもよい）、スピーチの数だけ縦長の欄を設ける。左端の欄に肯定側第1立論のポイントを箇条書きにする。一枚に書ききれない場合は、2枚目の紙を使う。否定側第1立論で、肯定側の論点に対する反論があれば、それを二列目の欄の対応するところに書き込む。反論がなければ空白になる（下の図では肯定側のII.A.に対応するところ）。位置がずれてくれば、矢印などでつないでおく。

ある論点について反論・反駁が繰り返されると、議論の流れは紙の上で左から右へ記録される。こうすると、ディベートの途中でも、最後でも、どの論点がどう反論されたか、また反論されていないか等が一目瞭然になる。

メモをとる時は略号や記号を使ってすばやく要点を書き留めなければならない。話し手が論点に番号や小見出しを付けていれば、それを利用する。肯定側と否定側の議論のメモは、違う色のボールペンを使うなどの工夫も役に立つ。

図3. フローシートの例

| 肯定 | 否定 | 肯定 | 否定 | |
|---------|------------------|------------|------------------|------|
| I. XXX | | | | 以下省略 |
| A. XXX | 1. XXX 2. XXX | XXX XXX | | |
| B. XXX | | | 1. XXX 2. XXX | |
| II. XXX | | | | |
| A. XXX | XXX | | XXX | |
| 以下省略 | | | I. XXX | |

フローシート自体は、ディベート特有のメモの取り方だが、話を聞きながらメモを取ったり、自分が話す前に要点をメモして、それを基に話をするというのは、効果的な口頭コミュニケーションに大いに役立つ。

3.7. 反対尋問（質疑）

試合形式によっては、各立論の後に相手側からの反対尋問の時間が設けられている。これには主に3つの目的がある。(1) 立論の不明確な点を確認する。(2) 相手の議論の弱い点を暴く。

(3) 後で自分達が述べる議論に必要な情報を相手から引き出しておく。(2)と(3)は即興で行うのは難しいので、授業で前述のシナリオ方式で発表させる場合は、事前に相手チームに質問を教えておく方がよい。ディベート大会のような場合も、事前にどのような質問をするか準備したり、想定問答集を作ることできる。

反対尋問では、質問をする側は質問だけが許され、議論をすることは許されていない。答える側はもちろん正直に答えなければならない。反対尋問はうまくいけば一見華々しく、いかにも口頭でのコミュニケーション活動が行われているという気になるが、論理的な議論を秩序立てて組み立てるといった目的にはかないにくい。注意しないと水掛け論の応酬のようになってしまう。あくまでも立論に対する「反対尋問」であることを忘れずに。

3.8. 伝達方法

何よりもまず、大きな声で部屋の後ろに座っている聴衆にも聞こえることが肝心である。発声練習を試みるのもいいだろう。次に、話す速度。速くなり過ぎると聞いている方がついていけなくなる。一般的にはある程度早口の方が説得力が増すという研究もあるし、大学のクラブ活動

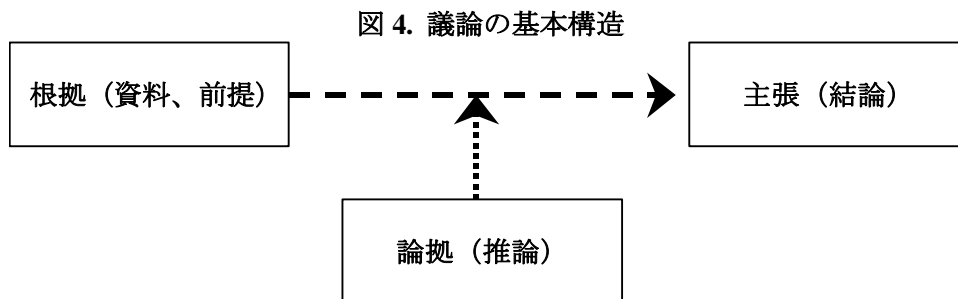
で行われている競技ディベート（ディベート大会）では、日米とも相当早口で行われるが、これは、競技という特殊な状況でのことで、教室に持ち込むわけにはいかない。大学生のディベート大会などを見学する場合は、この点を留意すべきだ。「ディベート甲子園」と呼ばれる中高生のディベート大会でも、一般的な話し言葉の感覚からすると相当早口と感じられるスピーチが多い。

4. 議論のしくみ

ディベートでもスピーチでも論理的な議論を組み立てるにはその仕組みを知らなければならない。また、文章を書いたり読んだりする時、以下に述べるようなことに注意すれば、論理的・批判的思考能力の養成に役立つ。情報が氾濫する現代社会において情報の送り手にも受け手にも不可欠の能力である。

4.1. 議論の構造

個々の議論は、単純化すると、話し手（書き手）が伝えたい結論である「主張（結論）」、その「根拠となる情報（参加者が共有している常識（前提）や文献などからの証拠資料）」、その両者をつなぐ「論拠（推論過程）」から成り立っている。図解すると次のようになる。



4.2. 根拠

根拠とは、主張に到達する議論の出発点となる情報である。文献からの引用（証拠資料）だけでなく、周知の事実等も含まれる。教育ディベートでは客観性を重んじるために、文献からの引用が重視される。いったん論証された主張を証拠としてさらに別の主張を論証することもある。

証拠資料には主として、事実、統計、専門家の意見がある。より良い証拠を探したり、相手の証拠の問題点を指摘するために、次のような点に注目したい。

- (1) 外的整合性。相互に矛盾する証拠があればどちらかもしくは両方が間違っているのではないかと疑う。
- (2) 内的整合性。一つの資料や発言の中で首尾一貫しなかったり矛盾があれば証拠の質は低い。
- (3) 出典の信頼性。出典が明示されているか。出典は権威あるものか、新しいか、中立か、等。歴史的事件の記録などはその時点に近い資料のほうが良い場合もある。
- (4) 統計の検証。調査方法は適切だったか、標本の数は十分か、抽出方法は適切か、質問の仕方はどうか、等。
- (5) 専門家の検証。問題によっては専門家の意見に頼らなければならないことも多い。発言している事柄の権威者か、偏見はないか、理由を挙げて意見を述べているか、等に注意。原子力発電問題のディベートで、電力会社の技術者は原子力発電の専門家かもしれないが、安全性についての発言は利害関係による偏見があるかもしれない。

4.3. 論拠

自分の主張をそのまま表す根拠があるとは限らない。利用できる根拠に基づいて主張を論証する。その根拠と主張を結び付けるのが論拠（ワラント、warrant）である。論拠には一般的な論理法則（推論過程）やそれ自体論証を要する情報がある。幾つかの種類の論拠を取り上げてみよう。

(1) **類推**。原発の安全性の議論は類推に基づくことがよくある。「チェルノブイリとスリーマイル島の原発が重大事故を起こした」という証拠を引用して根拠とし、「日本の原発も重大事故を起こすだろう」と主張するとしよう。論拠は「日本の原発と外国の事故を起こした原発が似ている」となる。この類推は一概には受け入れられないので別に証拠を使って論証しなければならないだろう。類推に基づく議論では、比較するものどうしだが、その議論に本質的な点において似ていなければならない。原発の例では、原子炉の構造や安全対策が本質的に同じであることが重要になる。

(2) **一般化**。複数の例から一般法則を導く。「A社の車Bはブレーキに欠陥がある」という主張を論証するために「車BはC氏所有のものも、D氏のもの、F氏のもの、E氏のもの、ブレーキに欠陥があった」という証拠があったとする。論拠は、「車Bは全て同じであろう（同一種の多数について言えることはその全てについても言えるだろう）」という規則性の仮定である。例が量的に十分か、典型的なものか、反例はないか、等に注意したい。

(3) **因果関係**。原因から結果を予測する場合と、結果から原因を推測する場合がある。原因と結果の間に一对一の関係がない場合は要注意である。「習慣的に喫煙すると肺癌を引き起こす」という因果関係が別の証拠から証明されているとしよう。これを論拠にして、「A氏が習慣的に喫煙する」という証拠から、「A氏は肺癌になるだろう」と主張できる。逆に「B氏が肺癌になった」という証拠から、「B氏は習慣的に喫煙していただろう」という原因の存在は証明できない。肺癌の原因は他にもあるからである。

政策論題で問題の解決性を証明するのに因果関係を用いる時も注意が必用である。喫煙を禁止しても肺癌は完全にはなくなる。先程のA氏のような人は手遅れかもしれないし、喫煙以外の原因から生じる肺癌はなくなる。「新たに喫煙を始めたかもしれない人について、喫煙が原因で生じる肺癌を防げる」という主張はできる。

因果関係が証明できない事象の間にも統計的に相関関係がある場合、それを論拠にする議論も組み立てられる。

(4) **しるし**。相関関係（共起関係）は因果関係以外の可能性もある。たとえば、人やモノの属性について、髪が黒く肌が黄色人種の肌色で日本語を話していたら、日本人だろうと推測できる。定義による場合は、日本国籍を持つ人を日本人、という定義を採用すれば、パスポート所持や戸籍の存在が日本人であることの証明になる。

ここに挙げたような論拠に基づく論証は、数学や形式論理学の証明とは違い、「ほぼ間違いがない」とか「多分そうだろう」という確からしさが高いか低いかの問題になる場合がほとんどである。100%確実な証明もできないが、1つの反例で議論が完全につぶれてしまうとも限らない。ディベートの議論はこのようなものが多いので、「われわれの証明は完璧です」とか「相手側の議論は完全に間違っている」といった一方的な発言は要注意である。

5. スピーチの構成

ディベートでは論理的で分かりやすいスピーチの構成が要求される。ライティングやリーディングでも扱うべきパラグラフやエッセーの構成と共通するところが多いので是非連携を図りたい。ここでは、肯定側第1立論を例にスピーチ全体の構成を説明し、次に、反論や反駁をする時の最少単位の構成を説明する。

5.1. 肯定側第1立論

スピーチ全体の構成は、導入部、本論部、結論部の3部分からなる。導入部の中では論文（論理的なエッセー）と同様に、スピーチ全体の主張（結論）にあたるもの、本論部の内容の予告編（道路地図、設計図、見取り図）がある。本論部では、いくつかの主要論点が展開され、各主要論点は小論点によって支えられている。結論部では、各主要論点をまとめる要約と全体の結論の繰り返して締めくくる。模式化すると次のようになる。

図 5. スピーチの構成

| | |
|-----|----------------------|
| 導入部 | あいさつ |
| | 全体の結論（論題に対する肯定否定の立場） |
| | 予告編 |
| 本論部 | 論点 1 |
| | 論点 2 |
| | 論点 3 |
| | ... |
| 結論部 | 要約 |
| | 全体の結論 |
| | あいさつ |

各論点の構成はパラグラフに相当し、主題文（トピック・センテンス）とその支持文（詳細内容）からなる。ディベートでは、番号、小見出し、論点、証拠、という構成になることが多い。

スピーチを書く時はまずアウトラインを作って構成を吟味してほしい。次に挙げるのは論題「私立高校のほうか公立高校よりすぐれている」の肯定が話題 1 立論の例である。

肯定側第 1 立論のアウトライン例

- I. 私立高校は教育の多様性を推進している。
 - A. 教育の多様化は良い。
 - 1. 人は多様な意見や価値観を有している。
 - 2. 第二次大戦前の画一的な教育が戦争につながった。
 - B. 私立高校は公立高校より自由である。
 - 1. 私立高校は文部科学省の影響が少ない。
 - 2. 私立高校は教育委員会の影響が少ない。
- II. 私立高校は公立高校より改善努力に熱心である。
(中略)
- III. 私立は公立より国際交流に熱心である。
(以下略)

完成原稿は次のようになる。

肯定側第 1 立論の例

われわれ肯定側は、「私立高校は公立高校よりすぐれている」という論題を支持します。理由は 3 点あり、(1) 多様性、(2) 改善努力、(3) 国際交流、です。それぞれ説明していきます。

理由 1、多様性。私立高校は教育の多様性を推進しています。

小論点 A、教育の多様性は良い。第 1 に、人は多様な意見や価値観を有しています。もし学校で同じことを同じ方法で教えたのでは、生徒は自分や家庭の価値観との相違にストレスを感じ、心的障害をきたします。第 2 に、第二次世界大戦前の画一的な国粋主義的教育が日本を戦争へ導いたと言えます。この過ちを繰り返してはいけません。教育学者の九州大学 XX 教授は 2000 年の著書で、... と述べています。つまり、私立学校は国粋主義的教育復活を阻止する鍵となります。

小論点 B、私立高校は公立高校より自由なので、多様性のある教育が可能です。私立学校は、『朝日新聞』1993 年 1 月 1 日付記事が紹介するように、法律によってその創立者の精神や独自

性を推進できることが保障されています。一方、公立学校は都道府県の教育委員会を介して文部科学省に操られています。

このように、私立学校は教育の多様性という点ですぐれています。（以下略）

理由 2、改善努力。私立高校は公立高校のり改善努力に熱心です。（以下略）

理由 3、国際交流。私立は公立より国際交流に熱心です。（以下略）

以上、われわれ肯定側は、教育の多様性、改善努力、国際交流、という 3つの理由から私立高校のほうが公立高校よりすぐれている、と主張します。ご清聴ありがとうございました。

ディベートのスピーチでは、時間の節約のために導入部と結論部は非常に短いことが多い。聞いている人が論題についてよく知っていて、しっかりとフロー・シートにメモを取っていることが前提になる。そうでない学園祭での模擬ディベート等の場合は、論題の導入や最後のまとめにもっと分量を割く必要がある。

5.2. 反論単位

反論・反駁する時に役に立つのが反論単位と呼ばれる短い単位の構成である。まず一般的な型を示す。

反論単位

1. 議論を特定する（番号と見出し）
2. 相手の議論を要約する
3. 反論を述べる
4. 反論を支持する（説明、証拠資料）
5. 反論を締めくくる

次の具体例は私立・公立学校の論題で、前回紹介した準備書面を利用している。こういった単位をいくつも組み合わせることで一つのスピーチが出来上がる。

反論スピーチの例

否定側の X 番目の議論です。公立の方が学費が安いと言っていました。反論が 2 点あります。

1 点目は、価値あり、です。たとえ私立の学費が公立より高くても、それだけの価値はあります。教育は費用の問題ではなく、質の問題です。

反論の 2 点目は、大差なし、です。学費の違いは教育費全体の中で考えれば大した差ではありません。（以下略。図 2. 準備書面参照）

このように、学費の議論は重要ではなく、私立高校の方がすぐれているという論題を否定する理由にはなりません。

6. ディベートの評価

ディベートの評価は試合の勝敗とディベート技能の評価という二つの側面がある。通常審査員は試合後、審査票（バロット）や口頭で勝敗を説明し、個々の技能や議論についての講評を行う。

6.1. 勝敗

勝敗は、基本的には肯定側が論題がおそらく正しいだろうということが論証できたかどうかで判断する。否定側の反論を受けて最終的にはそのように論証できなかった、と判断されれば否定側の勝ちとなる。ここでは、肯定側が論題の立証責任を負い、否定側には「推定」の利益が働く

と考える。事実・価値判断の命題として殺人罪を立証する検察（肯定側）には立証責任があり、被告（否定側）には推定無罪の原理が働く。

政策論題であれば、肯定側が、論題を具体化した政策案（プラン）が現状の政策より比較利益を生むということをおそらくそうだろうという程度に論証できれば、肯定側の価値となる。否定側は、政策案を採択しても現状と対して変わらないか逆に新たな弊害の方が大きくなるだろうということ審査員に納得してもらえればよい。

このような判断を行う審査員（審判）は、論題についての自分の知識や意見は一時棚上げにして、一つのディベートの試合の中で肯定否定の双方から提出された議論だけを判断材料として評価を行う。そのためには、試合の議論をできるだけ詳細にメモし、議論の流れ（展開）を追っていかなければならない。審査員はできるだけ客観的に判定を下す努力をするが、ディベートのような議論の評価においては純粋に客観的な判断ということはない。あくまでも聞き取った議論の解釈に基づくわけであるから、スポーツにたとえれば得点競技よりはフィギュア・スケートや体操のような審査競技に近いと考えた方がよい。

6.2. 技能の評価

技能の評価は、通常、審査票（評価票、判定票、採点票、バロット）に記入し、参加者にフィード・バックする。スピーチ全体や参加者の1試合内での総合的なディベート技能を全体的に点数化する場合と、個別の技能を点数化する場合がある。たとえば、「論点の分析」「証拠資料」「推論の論理性」「スピーチ構成」「口頭伝達（デリバリー）」などの項目が用いられる。この点数のチーム合計と上記の議論内容に基づく勝敗は必ずしも一致しない。たとえばサッカーの試合で、個々の技能にすぐれた選手をそろえてもシュートを決められず敗北するチームが出たり、ボクシングで審判の得点合計で優勢であった選手が突然ノック・アウトされるようなものである。

7. ディベートと倫理

ディベートによって培われる議論の力は自分の立場を弁護し相手の議論を攻撃する強力な武器である。このような強力な武器の使用に伴う倫理的責任について少し触れておく。

ディベートで自分の本当の意見とは違うことを言うのは倫理的だろうか。ディベートでは肯定側・否定側という立場の代弁者として議論をしていることに注意したい。ディベートの目的は双方が最善の議論を戦わせて第三者に最良の決断をする根拠を示すことにある。参加者も意見と発言者を区別することによってとかく個人攻撃になりやすい論争の弊害を改めるようになる。ディベートを通じて問題をよりよく理解すれば、個人の意見もさらに良いものが形成される。

教育ディベートはある意味で現実から離れたゲームである。自由な議論を認めることで論理的・創造的思考を訓練する。しかし、ゲームの世界と現実を混同すると無責任な発言や議論の力の悪用につながる。白を黒と言いくるめる詭弁家、ソフィストを育ててはならない。

教育ディベートでは文献からの証拠資料が重視される。利用にあたっては、出典の明示、文脈に沿った引用、引用と要約の区別、等、学術論文での利用と同等の規則を守らなければならない。

参考資料

G. ジーゲルミュラー、J. ケイ（著）井上奈良彦（監訳）『議論法—探求と弁論 第3版』福岡：花書院、2006年（ディベートだけでなく議論法全体を詳述）

G. Ziegelmüller & J. Kay, *Argumentation: Inquiry & Advocacy* (3rd ed. Allyn & Bacon, 1997)（上記の原著）
松本茂（著）『日本語ディベートの技法』東京：七寶出版、2001年（ディベート教育第一人者による教科書・指導書）

安井省侍郎（著）『初心者のためのディベート Q&A』（第4版）東京：ディベート・フォーラム出版会、2004年（競技ディベートの入門書）

伊豆田達志、蟹池洋一、北野宏明、並木周（著）『現代ディベート通論—復刻版』東京：ディベート・フォーラム出版会、2005年（競技ディベートの理論を詳述。初心者向きではない）

全国教室ディベート連盟 <http://nade.jp/>（主に中高生対象とする指導団体、ディベート甲子園の運営母体）
日本ディベート協会 <http://japan-debate-association.org/>（日本のディベート研究・普及の専門家による団体）